

「小学校につながる確かな学びの基礎を培う幼児教育」



園長室だより

城南学園幼稚園 園長 太田友子 令和5年7月4日



社会(園)でのお子さんの姿を共有しましょう

— よりよい「幼児期」をすごすために —



早くも7月に入りました。子どもたちは、園庭のプールに今夢中です。これに加えて年長さんは、実際にスイミングスクールにでかけ、専門コーチから指導を受けています。年長にもなると実にタフになってきます。



また、今年度、年少さんにも体育遊びを取り入れました。トミオカ体操スクールの岡崎先生のユーモアあふれる温かい指導のもとで、年少児は安心して楽しく活動に取り組んでいます。

さて、幼児期の学力は何といっても基本的な生活習慣を身に付けることです。まずは、ご機嫌さんで登園できるよう、ご家庭での食事、排泄、身支度には意識して取り組んでください。残念なことに、このことを軽視されるご家庭が少なくありません。間違いなく、基本的な生活習慣は一生ものの基礎学力です。

個人懇談会では、園でのお子さんの姿とご家庭の姿を共有しながら、今後にむけた「作戦会議」の場となるよう、ご協力ください。「我が子のことはもうわかっている」ではなく、社会(園)生活で上手く過ごせるために、他からの情報をうまく活用することが肝要です。あつという間に過ぎるのが幼児期。もう既に小学校につながる「大事な時期」が始まっています。

「安全・安心」 — アップデートの最優先課題 —



既にご存じかと思いますが、通園バスの安全装置の設置状況(6月時点)が公表されました。全国 55%、大阪府は 37%という結果に、さすがに驚きました。皆さんはいかがでしたか。

本園では、補助金を待たずして、4月には園バス2台に設置するとともに、教職員の実技研修も実施したところです。

このような痛ましい事故が生じた時、保護者の皆様は、本園は大丈夫なのだろうかとご心配になられることでしょう。

「本園は大丈夫」と根拠のない「説明」は通用しません。

「本園ではどうなのか！」と、常に教職員とともに、実態を点検し、充実・改善にむけたアップデートに努めています。



ようこそ、城南学園幼稚園へ！

7月11日(火)、午後、中国から視察団が来園されます。大阪公立大学の先生のご案内で、北京大学の先生と保育園長5名が参加されます。当日のおもてなしは、年長児を中心に今準備に入っています。

本園には、母国を中国とする子どもたちも多く、早速「中国語で何て言うの？」と先生たちも子どもたちといっしょになって教えてもらっています。

子どもたちはまた、中国や日本などとあまり意識することなく生活しています。これを機会に、互いの国の文化や伝統を知ったり、関心をもったりするようになればと考えています。

交流後は、年中児に報告する場を設けたいとも考えています。



子どもと向き合うことは、「自分」を知ること。

「保育関係雑誌」に掲載されていた内容をご紹介します。

「保育者が振り返る」 幼児理解が深まったあの頃、あの場面

1歳のHちゃんのオムツを交換していたときのことです。Hちゃんは自分で履くことができたので、いつものようにオムツを渡すと、珍しく「いや」と言って突き放されました。

自分でできることは、しっかりと自分でやる子どもに育ててほしい。そう願っていた私は再びオムツをHちゃんに渡しましたが、また返されてしまいました。そのやりとりを3回繰り返したところで、横で見ていた先輩が「Hちゃんはどのようにしてほしいんだろうね」と、諭すようにつぶやきました。その言葉の意味を考えた私は、はっとしました。なぜ私は、こんなにも自分の考えを押し通そうとしているのだろう、と。

もともとHちゃんは甘え上手ではなく、「どうしても」というときだけ、そっと甘えてくるような子どもでした。オムツを履かせてほしいと私にねだったのも、このときが初めてだったのです。

自分でオムツを履くのがいやなのではなく、私に甘えたいのではない。そう気づいた瞬間、Hちゃんのいじらしさを感じ、思わず涙がこぼれました。Hちゃんは不思議そうな顔をして、そんな私を見つめていました。「ごめんね、一緒に履きたかったよね」といってオムツを差し出すと、Hちゃんはそっと片足を上げてくれました。

このことを機に、自分が幼少期から「できるだけ人に頼らないように」と厳しく育てられてきたことを思い出しました。その経験が無意識のうちに保育に現れていたのでしょうか。

確かに、自分でできることを頑張るのは大切ですが、子どもですから甘えたいときもあります。どちらを優先すべきかを考えると、やはり子どもの気持ちだと今は思います。



そんな気持ちで接すると、次第に子どもが私を助けてくれるようになりました。私が給食の準備を始めると、自分から手伝うなどの姿が、あちらこちらで見られるようになったのです。子どもの気持ちに寄り添おうという意識をすることで、互いに「ありがとう」の気持ちをもって支え合う、まるで家族のような関係に一步近づいた気がします。保育者は知らず知らずのうちに、自分の育った環境に引きずられて保育をしているのかもしれない。そう気づかされた瞬間が、1年目にありました。



私たちは日々子どもに向き合っています。子どもに向き合う中で、「自分」に気付かされることが何度もあります。このような経験を通して、保育者は、人としても育てられていくように思います。

「保育者」を「親」に置き換えて読み直してはいかがでしょう。子育てを通して「親も育つ」と昔から言われています。分かっているようで実は分かっていない…。日々痛感です。